2019年9月22日（日）「つまずきと回復」

マタイ 26:30-35

30 そして、賛美の歌を歌ってから、みなオリーブ山へ出かけて行った。 31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。 32 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」 33 すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」 34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」 35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。

【序論】

私は牧師の端くれとして、常に変わらぬ願いをもっております。それは、信徒の皆様に最後まで信仰の道を歩み抜いていただきたいということです。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、信仰に立ち続けるということは、私を含め、人生における最大の事業だからです。教会生活には「つまずき」が付き物です。「つまずき」は大別して二種類あるでしょう。第一は、欠けある人間によってもたらされる所謂（いわゆる）「残念なつまずき」です。地上の教会にはどうしても問題が付きまといます。「こうであってほしい」「こうでなければならない」という期待や理想からかけ離れた状態に陥ることもある。乗り越えるのが困難な問題もあります。第二は、主イエスご自身に対するつまずきです。福音に対するつまずきと言ってもよいでしょう。古い自分の価値観と、真新しい福音の価値観がぶつかり合うことがあるのです。このつまずきは、より本質的なものであり、場合によってはその人の人生そのものを造り変えるかもしれません。新しく生まれ変わるためのつまずきというものがあるのです。「つまずき」という言葉自体にはあまり良いイメージはないかもしれませんが、聖書は必要なつまずきがあると語っています。

> **彼らは、つまずきの石につまずいたのです。それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」**（ローマ9:32b-33）

今日の箇所は主イエスの弟子たちのつまずきについて語っております。

【本論】

本論１．つまずきと回復の予告

そして、賛美の歌を歌ってから、みなオリーブ山へ出かけて行った。（26:30）

最後の晩餐が終わり、一行は二階座敷を後にしました。過越の食事は日没から始まり、深夜に及びますから、本来ならばこの流れで就寝するところです。食事の終りには、「ハレル詩篇」と呼ばれる、詩篇 115-118 篇を唱和する慣わしでした。さりげなく書かれていますが、この賛美には主イエスにとって一つの決意が込められていたと思われます。いよいよ敵の手に渡され、十字架につけられる時が目前に迫っている。その苛烈な現実に踏み出すための力。それがこの賛美でありました。

「オリーブ山」は、神が降り立つ山として知られていました（ゼカリヤ 14:4）。地理的にはエルサレムの東に位置し、キデロンという谷を隔てたところにあります。その道中立ち寄ることになるゲッセマネの園で、主は祈りをささげるのです。

そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」（26:31-32）

思ってもみない予告が主イエスの口から飛び出してきました。弟子たちは騒然としたことでしょう。今までの心温まる夕食の雰囲気から一転、一挙に酔いも醒め果てる、凍りつくような主のことばです。食事の席ではユダの裏切りが予告されましたが、今度は一人だけの話ではありません。残りの十一弟子全員がつまずくと言われたのです。

「つまずく」という言葉は、道に落ちている石につまずいて転ぶことを意味しますが、福音書全体では罪に転落することを表す表現として使われている箇所が多い（11:5、13:57、24:10）。気持ちの上では主イエスに付いて行こうとしている。しかし、戦いの備えができていなかった弟子たちは、プライドも何もかなぐり捨てて逃げ出してしまう。主イエスとの交わりが絶たれる。江戸幕府の下に行なわれたキリシタン迫害史では「ころぶ」という表現が用いられました。弟子たちは一時的に棄教するのです。

主イエスは、彼らが逃げ出すことにショックを受けるのでもなく、冷笑するのでもなく、それは聖書で預言されていることの成就なのだと言われます。ここで主が引用しておられる聖句はゼカリヤ 13:7 で、実際の箇所にはメシヤ的人物が登場し、彼が拒絶さ

れる描写がある。

剣よ。目をさましてわたしの牧者を攻め、わたしの仲間の者を攻めよ。--万軍の主の御告げ--牧者を打ち殺せ。そうすれば、羊は散って行き、わたしは、この手を子どもたちに向ける。（ゼカリヤ 13:7）

この「羊飼い」なる人物は民の指導者であり、その人が討たれることによって、神に逆らったイスラエルがまず審かれる。そして、民全体が大きな苦しみに遭う。主イエスはご自分の十字架と弟子たちの離散をこの預言に重ね合わせて見ておられるのです。しかし、物語はこれで終わりなのではありません。

全地はこうなる。--主の御告げ--その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは「これはわたしの民」と言い、彼らは「主は私の神」と言う。（ゼカリヤ13:8-9）

ここには、試練によって練られた民の回復の預言がある。主はここに書かれている通り、ご自分の弟子たちはひとたび棄教するが、必ず立ち帰ると約束されます。「**しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます**」とあります。「ガリラヤ」とは弟子たちが最初に召された地。主イエスに声をかけられ、従って行った信仰の出発地点です。主は、彼らの弱さを知りながらも、もう一度やり直すことができるという希望を残しておられるのです。

私たちも信仰生活において何かにつまずくことがあります。もう教会には行きたくないという気持ちになることもあるでしょう。しかし、主はどんな時でも私たちが帰って来ることを願っておられます。

本論２．信念と否認

すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」（26:33）

主イエスに棄教を予告された弟子たちは、心外だとばかりに反論します。この時にも、弟子たちを代表／代弁するかのように、ペテロが口を開きます。ペテロは良くも悪くも黙っておれぬ人だったようです。16 章でも、「**あなたがたは、わたしをだれだと言いますか**」という主の問いに対し、真っ先に「**あなたは、生ける神の御子キリストです**」（16:15-16）と答えていました。ペテロは常に十二弟子を代表している。そして、私たちを代表しているとも言えます。読者はペテロと自分とを切り離して読むことはできないのです。

ここでペテロは「自分だけはつまずかない」と宣言しています。それも、他の弟子た

ちと自分とを比較するかのように、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても」という仮定を加えます。他の 10 人は面白くない。「俺だって」「俺だって」と、こぞってペテロの言葉に便乗します（35 節）。しかし、思い出してみましょう。このように言う彼らは、ユダの裏切りが予告されたときに「**主よ。まさか私のことではないでしょう**」と口々に問うたのではなかったですか（26:22）。このように一貫しない弟子たちの様子を見ていますと、彼らの中には自分を絶対的に支える確信がないことが分かります。彼らが主イエスを愛していなかったということではありません。その言葉に偽りはなく、彼らは死を賭して従い抜きたいと思っていたのです。しかし、その信念は崩されてしまう。実際に敵に囲まれた時、彼らは自分が信じていた通りには行動できないのです。

皆さん、人間とはそういうものなのではありませんか。私たちもまた、本当の迫害下に置かれた時、死と背中合わせになった時、どのように行動するか、絶対にこうとは言えない面があるのです。

> **イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」**（26:34）

「鶏が鳴く前」とは、おそらく「夜明け前」という意味でしょう[1]。結果として、ペテロは一度ならず三度までも主を否むことになる。これは、たまたま口が滑ったということではなく、決定的な否認を意味します。

本論３．信念ではなく恵みによって

> **ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。**（26:35）

このペテロたちの宣言は、この後いとも容易く崩れ去ることになります。これは弟子たちの武勇伝とはなり得ぬ展開です。彼らは信念を貫き通すことができないのです。敢えて「信念」という言葉を用いさせていただきました。「決意」と言ってもよい。如何なる強さをもっていたとしても、それが人間から出たものであるならば、主の御前に崩れ去らねばなりません。主イエスに従うということは、人間の決意によるものではないのです。

> **あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。**（ヨハネ 15:16）

弟子たちは自ら主に従っていると思っていたかもしれません。しかし、実のところ、彼

---

[1] あるいは、ローマ時間で夜の時間は四つに分けられ、第三の時（12～３時）の 12:30、1:30、2:30 を示す合図のことを「雄鶏の鳴き声」と呼んだことに由来するのか。

らが弟子となったのは主イエスの側の選びと召しによる以外の何物でもなかったのです。私たちも信じて洗礼を受けるとき、自分の意志で決断したように感じるかもしれません。しかし、実は私たちの思いに先行し、主イエスのイニシアティヴがあったのです。人はそれに応えるのみ。

ペテロをはじめとする弟子たちは棄教し、もう戻れぬところにまで下っていきます。羊飼いなる主イエスは死に、もはや頼るべき存在を失うのです。もしこれで物語が終わったとしたら、その後のキリスト教史は存在しません。主の復活によってすべてが新たにされるのです。甦りの主は弟子たちに先行してガリラヤへ行かれる。そして、もう一度彼らを弟子として召される。ここに「恵みの契約」が完全な形で現れていきます。弟子たちの棄教によって、本来ならば主イエスとの契約は断たれたはずです。しかし、主が十字架上で流された血は、とこしえの契約となって、かえって弟子たちとの関係を完全なものとしました。つまずいた弟子たちに帰る場所を与えてくださった。そして、もう一度ご自身の宣教の働きに召してくださる。それも、もはや人間の力によるのではない、聖霊に導かれながら御言葉を語り、宣教の業を全うしていくのです。

【結論】

私たちの信仰生活には「つまずき」がつきものです。どんなに整った教会でも、それは避けて通ることができません。罪人の集まりである以上、人につまずくこともあれば、つまずきを与えてしまうこともあります。しかし、それは棄教そのものとなるべきではないのです。なぜなら、主イエスは誰一人としてご自分から離れることを願っておられないからです。そして、立ち帰る場所を用意しておられる。私たちにも「ガリラヤ」があります。帰るべき信仰の原点があります。毎週の礼拝に帰って来ることは、世の戦いで苦しみ、傷ついた者の原点回帰とも言えるでしょう。主イエスの「血の契約」は決して無効にならないということを、忘れずに歩んで行きたいと思います。

【祈り】

恵み深い私たちの神よ。人は多くのものにつまずきます。残念ながら、地上の教会には欠けがあり、人が人をつまずかせてしまうことがあります。しかし、私たちはもっと本質的な「つまずき」を知らなくてはなりません。自分の信念や決意が崩され、主の恵みによってのみ生かされる者でありたいのです。弱い私たちに尚も帰る場所を与えていてください。契約の主、イエス・キリストの御名によって祈ります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
ご自身の計画により、牧者を討ち、羊を散らし給うた、父なる神の愛。
つまずいた弟子たちに、尚も帰るべき場所を用意し給う、主イエス・キリストの恵み。
人の信念によってではなく、神の憐れみに依り頼む信仰の歩みを全うさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。